

視察先別報告 エチオピア

【青年海外協力隊】

デザイン隊員、経済・市場調査隊員活動視察

概要

エチオピア観光通商公社は、資源及び文化等を調査し、同国に適した観光土産物の製作及び販売を主とした事業を行っている。しかしながら、市場の需要を考慮した製品、新製品の開発に取り組む技術・知識のある人材が不足しており、各部門も組織的な運営機能が欠けているため、既存の製品を市場に流すことが中心となっているのが現状である。そこで青年海外協力隊には、既存の製品の質の向上と、新製品の開発、市場ニーズに合う新しいデザインの提案をすることが求められている。エチオピアの伝統的デザインを取り入れた魅力的かつ実用性の高い商品（家具、照明、絵、インテリア雑貨、民芸品等）の開発と市場調査や市場開拓等の販売促進強化が期待される。

01

井口 久美子 資源や文化を調査し観光土産物の製造、販売を主とした事業を行っている公社であるが、それが災いした事例ではないか。視察した店舗は観光ルートには入っておらず、大規模な家具店では外交官しか買えない。政府系企業であるがための大きな問題を感じた。固定価格制を用い、利潤追求主義ではない体質で店頭収入は赤字だと言うが、解決のための研修は行っておらず、輸出定期取引は行われていない。現隊員は一年半の活動の中で商品サンプルが一つ二つできた程度で、何をするにも手続きに時間が掛かりすぎ途中で頓挫すると言う。家具の彫はカッターで掘る等、長年日本が機材提供と人材派遣を行ってきた成果がまったく感じられず、国際協力の撤退検討も必要ではないか。なお青年海外協力隊員の派遣は今期で一旦終了とのことである。

02

板野 光司 観光局のデザイン担当とマーケティング担当として青年海外協力隊がそれぞれ1名ずつ活動されていた。2人とも若く、経験豊富ではないことと、権限がないことで思い通りにいかないことが多く苦勞されていた。その中で、日々試行錯誤しながら何かできないかと動いている姿は、折角来たんだから何か少しでも役に立ちたい、成果を出したいともがいているように映り、輝いて見えた。たとえ今回の期間内にエチオピアに何かを残せなかったとしても、今後のより大きな挑戦をしていく上での土台になったに違いない。貢献度だけ見ればシニア海外ボランティアの方が青年海外協力隊よりも役に立っている印象である。しかし、若いうちにエチオピアで経験したことは、今後の彼らの人生をより豊かにし、彼らが接する人たちに与える影響は期待できると思う。

03

今村 健司 自らの思い通りにモノゴトが動かない現場での青年海外協力隊の苦勞を知る。観光通商公社社長のお話によれば、「エチオピアと日本は自然資源が乏しい点で似ている。経済発展を遂げた日本のイメージに大いに期待している」とのこと。しかし殆どの収益は免税店での売上だ。未熟な観光産業を立ち上げるために、予算が付かない中、自らの手足と頭を使って市場調査を行い、サンプル品を作って、デザイン隊員としての使命を果たそうと、懸命に努力する青年海外協力隊の姿は立派だと思う。しかし受入先と青年海外協力隊の双方のためにも調整作業には改善の余地があると思えた。青年海外協力隊が実施したアンケートによるとエチオピア人の支出の第二位はアクセサリーだそうだ。エチオピア人は美貌の持ち主であると同時に、ファッション・センスもあるのかも知れない。近い将来、もっとファッションを楽しむエチオピアの人々の姿が増えるのではないかと、可能性を感じた。

04

久保 雅義 エチオピアの政治・経済のシステムには社会主義国時代の名残があり、陰に陽に改革の妨げとなっているようだ。この公社には現在までに延べ20名程の青年海外協力隊員が派遣されてきた経緯がある。しかし現任隊員の活動はさほど順調には見えなかった。要請されたデザイン開発も煩雑な手続きのためなかなか実現せず、マーケティングも公式チャンネルを使うよりは、□コミやNGO経由がむしろ有効なくらいだ。青年海外協力隊の派遣は現地の要請に応じて行われるが、要請に応えることが成長や自立につながるのか、その成果についての検証は「ボランティア」であるがゆえに求められていない。しかし、隊員は「青年海外協力隊を後輩たちにも勧めたいし、将来も自分は国際貢献の仕事をつづけたい」と明るく語ってくれた。

- 05 進藤 千枝 観光立国を目指すエチオピアだが、観光公社には、まだまだ改善の余地があると感じた。日本とエチオピアは資源が少ない国という共通点が多くある。ただ、観光資源の活かし方やエチオピアの人々の感性を活かしながら、青年海外協力隊員のサポートを求めるなどの点では改善の余地があろうと思った。良い素材も活用が十分になされないと宝の持ち腐れになる。エチオピアの良さを、エチオピア人自身が感じ切れていないのかもしれないと思った。その良さを気付かせられれば、観光立国になりうるのではないだろうか。隊員は、自分なりの方向性を見つけ自分のやり方で、精一杯の努力をしていた。
- 06 塚田 好美 エチオピア観光通商公社は政府機関であることから、青年海外協力隊は、申請等における手続き面で苦労していることが伝わってきた。行政への手続きにおいて労力と時間がかかるのは、どの国でも、少なくとも日本においても同じだと思った。最近ではICT（情報通信技術）の活用により、一部簡素化されてきたところもあるが、行政への手続きはどれも面倒で融通が効かないと感じる。私が行政の立場だからこそ強く感じたところもあり、日本でもこれから変えていきたいと考える点である。青年海外協力隊は、現地の体制や仕組み等において、日本とは同じ/異なる部分を見つけ、日本の外からそれを見つめ直すことが求められていると感じた。青年海外協力隊の方々には苦労する面は多くとも、それに立ち向かうことを忘れず、帰国後の日本での活躍も期待する。
- 07 富田 すみれ子 視察をした観光通商公社でもカイゼンが取り入れられおり、カイゼンの広がりにもまた驚かされた。皆川隊員のデスクがあるオフィスには“KAIZEN- 5s. Practice a GOOD Beginning. Never Ending practice”という手作りのポスターが貼ってあったのが印象的だ。一方で、青年海外協力隊員の派遣の在り方に疑問を抱いた事も事実だ。要請があるからこそ派遣されるはずであるが、隊員の能力が十分に発揮されていない印象を抱き、派遣先の受け入れ態勢も見直されるべきであると考えた。
- 08 中村 明夫 率直な思いを敢えて申し上げたい。この公社に優秀な青年海外協力隊員を送り続ける理由を見出せない。1968年より短期シニア海外ボランティアを含め20名程度が派遣されていると言う。現隊員が1年半活動して様々な新商品やパンフレットの改善提案をしても予算化されず塩漬け状態になっているという現象は過去にも似たケースが無かったのだろうか。「いくら成果を上げたところで給料が上がらないので公社員のモチベーションが上がらない」という公社側の事情もあるのだろうか。水道公社の体質と同じである。免税店の経営により、協力隊が派遣されているハンディクラフト部門は黒字を維持しており、この部門の向上に力が入らないと言う。日本の納税者の税金から支出されている青年海外協力隊員の派遣コストはその成果と十分に見合うものなのだろうか。
- 09 橋本 佳澄 想像以上に文化的な資源がないことに驚いた。しかし、何も無い状況から「考える」ことで商品を作り出そうとしている青年海外協力隊の方々への熱意に頭が下がる。また、現状では問題が手続き上で多くあり新商品の開発を進めるのもままならないと嘆いていたのが印象的だった。本当にこのままの支援体制でいいのだろうか。現状が打破できなければ何らかの変革が必要だろう。何が今本当に求められているのかを常に考えるべきである。援助の打ち切りはしないのだろうか。もちろん本公社に20年も支援を続けてきた日本の協力姿勢は素晴らしいと思う。だが、エチオピア・日本の両国に国際協力への「情性」は発生していないだろうか。一度再考する必要があると思わせる現場であった。
- 10 三谷 剛 新商品開発は一年半活動していてサンプル品が一つ二つ出来た程度、20年前から変わっていない分りにくいパンフレットの改善原稿を作成したが予算がない、かつ手続きが役所的でなかなか進まないなど少し残念そうな顔で青年海外協力隊員が状況を説明してくれました。このような、周囲を変えることが難しい中で、エチオピア人の収入、週末の過ごし方などを独自に調査して、そこで売れるものを企画していました。本人たちは苦しい状況と推察しましたが、問題解決力を高め、周囲を巻き込むことで本人自体は成長していると感じました。彼ら、彼女達しか知らないエチオピアの現地ニーズを細かく獲得しているはずであり、日本企業が今後協力することで労せずニーズを取得出来る絶好の機会になると期待せずにはいられませんでした。
- 11 金子 卓渡 観光通商公社だが、ほとんどがVIP向けの免税店経営で成り立っているという話であった。青年海外協力隊は要請に基づき活動しているが、当初依頼されたものと実際の仕事内容は異なり、その必要性には疑問が残った。観光客を対象とした商品開発を行う隊員の方は、企画がなかなか実現しないと悔しそうな顔をされていた。2年という任期の中で、成果を出すことは難しい。現地で青年海外協力隊を管理するボランティア調整員の方からも、やり残した想いで赴任地を去っていく人は多いと伺った。青年海外協力隊は現地の職務において、かなり柔軟な対応が求められる印象を持った。数々の困難が彼らの糧となることは間違いなく、日本人の人材育成という点では効果的なものだろう。帰国後その経験を日本社会に還元し、活躍して欲しい。